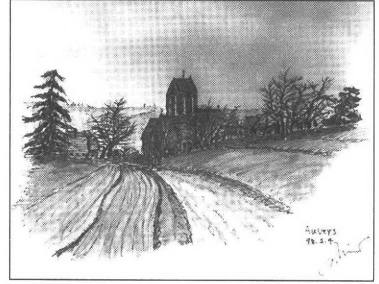


# ESSAY

## オーベル紀行

森 武生

都立駒込病院外科



パリの国際対癌化学療法学会へ行った。毎年必ず2月にパリのパレドコングレで開かれる学会で、ヨーロッパを中心とした比較的こじんまりとした学会であるが、まじめなのとアメリカやイギリスと違って英語がとともわかりやすく、EUになってからのヨーロッパの国境を越えた大きなプロジェクトの内容が揃めるので、このところ毎年行くようにしている。

いつも2月のパリは寒いが、うるさい観光客も少なくホテルや飛行機代も安い。人が少ないので美術館も空いていて好きな絵も学会の暇にちょこっと地下鉄で見に行くことができる。今年うちの外科の若手のDr. Yと出掛けた。いつものマレのホテルの親父の頭髪が去年に比べて少なくなったのには驚いたがそれを言うと、Dr. 森の頭も真っ白になったねえなどと言われそうで黙っていたが、例年のように暖かく迎えてくれた。ホテルの周りのたたずまいもちっとも変わらず、古い街路のゆるやかに曲がった道を人々がゆっくりと歩んで、なんとなく故郷に帰ったような気がする。

2日目にDr. Yの発表がまあつつがなく終わりほっとする。彼も英語の長い発表は4回目くらいだが何とか原稿なしで時間内にできるようになり、発表前は「先生、胃が痛いっ

す！」などとほざいたのがケロリと笑っている。私も昔はああだったなあと、なんだか羨望を感じる。近く中華料理屋で乾杯してから、今日の午後は卵巣癌と肺癌のセクションばかりなので、この季節のパリには珍しく暖かいとさえ感じる晴天でもあり、どこかへ行くことにした。Dr. Yが珍しく画家のゴッホ由縁の地のオーベルというところへ行きたいと自己主張、決める。ただしガイドブックによると北駅から出発してポントワーズで乗り換えクレイユという方に向かうということしかわからないのでやや不安ではある。北駅に着くと案の定五里霧中、右往左往して、例の動物的カンでポントワーズがRERの終点であることを見つけて切符を手に入れた。うとうとしているうちに終点。さてクレイユ方面というのがわからない。駅員もいなければ、どこにもそんな表示がないし発車予定表示板にもない。散々探したうえで聞いた若いお嬢さんが親切で、改札の外まで行ってみてくれ、彼女の乗る電車の発車間際に飛んで帰ってきて、「外の機械に聞け！」と叫んで走り去った。機械に?? 外へ出るとオーベル行きの切符が無駄になりそうだがやむを得ず出ると確かにインフォメーション用のコンピューターがおいてあった。それでもクレイユと入れるとこの時間帯では北駅へもどれという表示が出てくる。うぬ！ 最後にえいっ

とオーベールと入れたら出てきた。何のことはない、ここからわずか10分だった。クレイユには一日本当に少ない本数なのか、またはバス連絡しかないことがわかった。罪なガイドブックではある。Dr. Yは動物的カンのすさまじさにややあきれ気味。

オーベールは小さな川の谷間の無人駅。何人かが降りると駅には誰もいなくなった。駅前の道路をわたるとそこにゴッホ記念公園などというものさびれた手入れの行き届かない公園があり、ドンキホーテのようにやせた漫画的なゴッホの銅像が手持ちぶさたに立っている。少し歩いて角がゴッホの住んでいた家。狂気にむしばまれたゴッホが最後の数カ月を過ごした家である。ここから谷間から上がっていく道筋のところどころにゴッホの描いた構図と同じところに彼の絵が立てられている。

今は冬。確かに季節は違うが、実際の風景と絵を見比べると、本来の直線が妖しい曲線となって描かれている。天才と狂気の隣り合わせを肌身に実感する。

駅から少し上がって谷間を見下ろす小径にはいるとそこはフランスの田舎そのもの。穏やかな冬の陽が土壁を暖かく包み込む。丘の中腹に古い教会がある。珍しい形の鐘つき塔をもつ。1100年代に建てられたものだそうだ。直線的なこの教会もゴッホの絵では曲線で身をよじるように表現されている。

丘を登るとそこは地平までつづくような麦畑で今は緑のカーペットのように丈のない草で一面にこの寒さにもかかわらず緑に覆われ

ている。畑の間の舗装のところどころ剥げた道をたどると一角に唐突に墓地が座っている。入ると無数の墓、石造りの棺の上に故人の軌跡や写真の入った墓誌が並び花が飾られている。どこかにゴッホの墓があるはずだが、どうしようと思っていると犬を連れて老人が現れ、こちらは日本語、向こうはフランス語で、とにかく理解し合う。探し当てた墓は、ほかは石造りなのに、ゴッホと弟のテオの墓は、土盛りの上を緑の蔓草が覆っただけで古びた墓石が立つ小さなものであった。でも仲良く隙間なく二つ並んでいる。自己の天才をもてあまし、ついに狂気に陥った兄と、その兄の天才を最後まで信じて助けていった弟。普通の人間は、後世に残る仕事などできることは皆無である。死ねば無が残り、愛された人たちが絶えれば、どんなに立派な墓を建てても、やがて忘却のなかに埋もれていく。人々の心に残るゴッホであれば、墓なんてこんなものでも十分なんだなあと思い、そしてそれをことさらに飾り立てないフランスの田舎の人たちに共感する。

帰途丘の上の麦畑から教会を描きながら、やわらかな冬の夕暮れに沈む谷間を見つ、この和やかな時のとまったような村でも癒されなかった、ゴッホの心に深い哀悼の念を抱いた。ただし一緒に描いたDr. Yの絵には、中央にやや傾いた教会があるだけであとはぎらぎらの夕日が空の半分以上を占めているものであり、かなりおかしいものであった。天才でなくとも狂気は感染するのかしら？